

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

2019 年 7 月 8 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士後期課程三回生

氏 名 高木 裕貴

助 成 の 種 類	2019年度 ・ 国際研究集会発表助成	
研 究 集 会 名	武漢国際カント会議	
発 表 形 式	<input checked="" type="checkbox"/> 招 待 ・ <input type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()	
発 表 題 目	Character and Sociability	
開 催 場 所	武漢大学	
渡 航 期 間	2019年 6 月 2 日 ～ 2019年 6 月 6 日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	150,000円
	使用した助成金額	150,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空チケット(往復): 148,800円
		自宅から関西国際空港 交通費: 1,200円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)	

成果の概要：高木裕貴（文学研究科・博士課程三回生）

武漢国際カント会議は、武漢大学にて二日間に渡って開催された。私を含め、世界各国から来た 16 人の研究者が発表した。また、中国国内のみならず、国外からも 60 人ほどが出席した。

私の発表は一日目の午後に行われた。私の発表題目は「性格と社交性」である。その主なテーゼは、「自然的動機である社交性が、道徳的行為者性を構成する性格を形成する」というものであった。私の発表は滞りなく進められ、質疑応答も活発であった。時間上、4 つの質疑しか受けることができなかったが、そのうちいくつかは意表を突くものであった。とりわけ、批判期と晩年における性格概念の変遷をいかに説明するか、という問いについては再度取り組む必要があると感じさせられた。さらに、発表が終わるやいなや、数人の出席者が私のところに駆けつけ、様々な質問をしてくれた。また、私も他の発表に対して質問することで、多くを学び、また彼らと交流することができた。

出席者からの主なレスポンスを「成果」として記しておきたい。

第一に、オーガナイザーの **Samuel Kahn** 教授からは、私の発表は世界的に見ても例を見ない内容であるため、早いうちに海外のジャーナルにおいて出版するように勧められた。また、そのためにも、海外の学会 (**U. K. Kant Society**) に私を紹介をしていただけるとのことである。

第二に、**Kant-Gesellschaft**（世界最高峰のカント学会である）の重鎮である **Ted Kinnaman** 教授には、まず私のドイツ語力を褒めていただいた。近年、英語圏におけるカント研究者は十分なドイツ語力を備えていない場合が多いため、ドイツ語力をある程度習得している私を **Visiting Scholar** として彼の勤務校に迎えたいという提案をいただいた。（中国語や日本語は、英語と比べるとドイツ語との違いがあまりにも大きい。それゆえ、我々は翻訳の限界を感じざるをえず、したがってドイツ語を習得するのである。これは英語圏の研究者には感じにくいことであろう。これは、中国の研究者と議論をして気づいたことである。）

第三に、**John Walsh** 先生には、私の発表は非常にオリジナルであるとの評価をいただいた。カント研究には長い歴史があるため、近年のカント研究は以前の研究の続きであったり、焼き増しであることが多い。カント研究は停滞していたと言える。カント研究に「新たなフィールド」はもはやないと考えられていたと言ってよいかもしれない。そのような中で、若手の研究者がカント哲学の新たなフィールドを開拓している姿は刺激的であった、とのコメントをいただいた。

第四に、出席者全体からのレスポンスとして、私の研究テーマがそもそも新鮮で興味深いとの感想をいただいた。これは必ずしも私自身の手腕によるものではない。それゆえ、しばしば彼らのコメントは私ではなく、カント自身に向けられていた。しかし、カント哲学のこれまでは無視されてきたフィールドを彼らに紹介し、興味をもってもらえたことは、

私の自信にもつながった。私の研究テーマは確かに日本国内においては例を見ないものであろうが、世界的に見てもそうであるということを実感できた。

最後に、私自身が大きな収穫であったと感じていることを記しておきたい。第一に、中国におけるカント研究の状況を知ることができたのは非常に貴重な経験であった。中国の研究者は日本の研究者に比べ、非常に多くが海外にて留学した経験があるため、高い語学力と研究力をもっていた。これは私が将来海外において研究する際に参考になるだろう。また、これまで私は中国の研究者とは交流をもっていなかったもので、新たな人脈を作れたことはありがたいことである。カント研究がこれからますます活発になるであろう中国との関係を保っておくことは、将来の様々なチャンスにもつながるであろう。

第二に、世界のカント研究と日本のカント研究を比較する機会を得られたことは重要である。まずもって感じたのは、日本のカント研究、カント研究者、哲学者は、世界のそれらに決して負けていないということである。それはおそらく、日本人の勤勉さと日本の哲学者の原典主義にあるのであろう。それにもかかわらず、日本の哲学者は他の非英語圏の哲学者に比べると、英語にてジャーナル投稿する傾向が低いように思われる。しかし、元来十分に高いレベルを誇っている日本のカント研究者も臆せず海外にて論文投稿・発表をしていくべきだと感じた。これは自分にとって最も大きなチャンスである。